

往生拾因私記を讀む

前田 聽 瑞

わが三條流の祖、望西樓了惠上人の攝化度生の芳躅に關していつかは鳥瞰的觀察を試みたいとはわたくしの兼ねてからの希望であつた。かうした希望を抱きながら無爲に月日を重ねてゐる間に、さう／＼了惠上人の六百年忌を邀へることになつた。昨年の三月二十九日は恰も上人の第六百回目の忌日に當る。三條の檀王法林寺では本年の春を以て其開基であつた上人のために盛なる法會が營まれる筈である。わが佛教専門學校に於ても亦この淨土教學不朽の一大偉勳者を記念するために「望西樓了惠上人特輯號」を編輯して、上人に對して深い感謝を表することになつた。この特輯號の編輯者のわたくしに課した題目は「往生拾因私記を讀む」といふのである。けれども私は決して了惠上人通ではない。従つて私は自分でも「往生拾因私記を讀む」といふやうな問題を取扱ふに適當な者でないことを熟知してゐる。茲にわたくしはたゞ課せられたまゝ、にこの課題を果すべく試みはするが、この小さいアルバイトはたゞ謹んで派祖了惠上人六百回の忌辰を記念し隨喜する微衷を披瀝するに過ぎない。

望西樓了惠上人に云へば淨土宗三祖記上人門下の上足にして、三條流の祖にして高名かくれもない。幾編の著作によつて博學達識の學僧であることを證明してゐるのみならず、かの和漢兩語燈錄の編纂によつて、法然上人、聖光上人、然阿上人の評傳によつて、「往生論註」、「往生拾因」に關する註釋によつて、深重なる護教の大師であり、才、學識の三長を具へた編著の雄才であり、秀れた歴史家であることを證明してゐる。わたくしはかつてその「往生拾因私記」

三卷を涉讀して大に上人の達識に私淑しつゝ、今日に及んだ。この書は一見單なる「往生拾因」の一解説書ではあるが、わが日本淨土教史上、源信僧都と法然上人との間にあつて念佛弘通の第一線に立つた永觀律師の偉勳を讃仰し、しかも彫刻的な明晰をもちながら善導宗としての自らの立場を守つてゐる實に堂々たる創作である。

ところで、今この「往生拾因私記」を前にしてその想像の翼をひろげるに、いろいろのこゝが考へられる。が、今回はたゞなげ了惠上人は「往生拾因」の註釋を思ひつかれたか、それから上人の「往生拾因」に對する態度をいつたやうな點に觸れるだけで満足したいと思ふ。

なげ了惠上人は「往生拾因」の註釋を思ひ立たれたか、まづこのこゝから考へてみる。もつこもこれは私一個の考へで明るい世界には通用しない暗から暗への史論であるかも知れない。

「往生拾因」が永觀律師の著述であるといふ點に於て、まづ永觀律師に一瞥を投ずる必要がある。けれども永觀律師は文章博士源國經の子であつた。若い時分には東大寺で登壇受戒をせられ、又當時の學風であつた三論、俱舍、唯識をも學ばれた。そして洛東の禪林寺は永觀堂と稱せらるゝ、程律師には緣故の深い道場であつたといつたやうな永觀律師の一代記はこゝには餘り必要はない。今の私に必要なのは「往生拾因」の著者としての永觀律師である。

さて、「往生拾因」の開卷第一のこゝろに、

念佛宗 永觀 集

と出してゐる。この撰號は正に永觀律師の眞面目であり金看板でもある。そしてその後序に

夫以衆生、無始輪廻諸趣、諸佛更出濟度無量、恨漏諸佛之利益、猶爲生死凡夫、適值釋尊之遺法、蓋勵出離之聖行、
(中) 鷲峰雲晴四十八願月圓、玉城春來十六想觀華鮮、月光重百練、而彌陀影現、華色入七寶、而國界嚴飾、幸依念佛
之一宗、聊集往生之十因、出輪廻之鄉、至不退之土、若非此行、復尋何道、

こゝ、實に輕快典雅な筆致で大いに自信のあるところを披瀝してゐる。これは確に念佛獨立の宣言と見てよい。かうした思ひ切つた宣言書を發表してゐるにも拘らず、永觀律師の念佛宗は遂に教團を形成するに至らずに終つた。「拾遺往生傳」の筆者三善爲康に云はせるこゝ、往生拾因の義旨を傳へて、念佛宗となるものが多かつたやうであるが、それが教團を組織するまでに至らなかつたのは、不思議であつて不思議ではない。春に遣はねば櫻花も開かない。永觀律師は惜しいここには春にめぐり合はしてゐない。若し鎌倉時代に出くはせたならば、まだくもつこ伸る人であつたらうと思はれる。あれだけの自信のある念佛運動をやつた方であつたのだから、もう暫らく御存命であつたならば、そんなに大きな事をせられたかも知れない。こも角永觀律師は時代の波にしてやられたこいふ形である。その上、永觀律師には全然「念佛人」になりきつてゐないこいふ弱點があつた。例へば民政黨内閣において黨人に非ざる幣原外相を濱口首相の代理とし、之をして議會に臨ましめるこいふこゝに就て、目下世間で法理上並に政治上の議論が熾であるこ同じやうに、永觀律師の思想的態度も頗る曖昧で、念佛宗とは云び條、所謂「ヒトリダチ」の念佛ではなくて、三論宗の息が濃厚にかつてゐる。念佛宗において、念佛人、云ひ換へれば末代凡夫だこ名乗り得る本統の腹が出来てゐない律師が、念佛宗をリードして行く點において確かにそこに一つの弱點があつたのではないかこ考へられる。「道綽の遺誠に依つて火急に唱名す」こまで云つてゐる律師でありながら、道綽の聖淨二門の教判、さては淨土門の依つて立つ約時被機説には丸で顔をそむけてゐるこころは、「念佛人」になり切れない悲哀であるこ同時に、その念佛宗なるもの、一の缺點ではなかつたやうか。わが法然上人こそは所謂念佛人としてのトップを切つた「元祖」である。それ故にこそ法然上人の念佛運動が自信に満ちて居り、随つて社會を引きつけ教團を形造り得た所以である。けれども、永觀律師の思想運動が、わが宗祖法然上人に大きなヒントを與へてゐるこゝは看過するこゝが出来ぬこ思ふ。

かの藤原敦光が關白大相國の命旨によつて、拾因後序なるものを書いた中に、

首楞嚴院沙門源信、作「往生要集」傳於世、今東大寺比丘永觀、作「往生拾因」以繼之、

云つたやうに、(往生拾因私記卷上に出づ)「往生要集」は「往生拾因」は兩者の偉勳を永くわが浄土教史上に留むる隆然不磨の記念碑である。源信僧都は言ふまでもなく、法然上人以前に於けるわが浄土教史上に於ける唯一の立役者であるには相違ないが、こもすれば永觀律師がこの大物のために史上上の位置を脅されがちなのは甚だ遺憾である。

さて、以上はなせ了惠上人が「往生拾因」の註釋を思ひ立たれたかを判断するための私の貧しい準備である。

暫らく了惠上人の著作的活動の跡を大觀するに、まづ語燈錄の編輯をはじめとして、無量壽經に關するもの、往生論註、選擇集、圓頓戒に關するもの、それから歴史もの、そして往生拾因の註釋なきである。ところで、試みにわが了惠上人を不斷に支配したこ考へられる日本浄土教系の人師を探ぐるならばまづ宗祖大師、二祖聖光上人、先師良忠上人を中心として、永觀律師、源信僧都に遡つて行くのが自然であらう。支那へ行けば、善導大師、道綽禪師、曇鸞大師、印度へ渡ればまづ世親菩薩のものが常道であらう。さて、かうした人師を數へ上げた上で、了惠上人の著述を振り返つてみるに、世親、曇鸞もの、研究は自分の手で一應は済んでゐる。道綽もの、善導ものになるに、先師良忠上人が既に完全に手をつけてゐる。そして源信ものも先師の手によつて立派な註釋が出来上つてゐる。ところが、永觀ものになるに誰も手が下してゐない。しかも永觀もの、愛讀者が當時相當に廣かつたこいふ事實が、恐らく了惠上人をして私記三卷を述作せしめたのではないかと思はれる。

議論はこに角、わが了惠上人は日本浄土教史上の一大殊勳者に對して適當な記念碑を建てた人であると思ふ。今日では永觀律師を想ふ毎に、必ずまづ了惠上人を憶ふ。まことに「往生十因私記」は記念した人こ記念された人との、二人の記念碑であるこいふてよい。爾來、西譽の見聞一卷、良譽の樛要鈔三卷、貞準の新鈔三卷、了意の直談十五卷等續々記念碑の建てられたのは悦ばしい。

次に 私は了惠上人の「往生拾因」に對する態度を考査してこの小稿を閉ぢやう。了惠上人は「往生拾因」の忠實なる祖述者ではない。上人は決して永觀宗の御用學者ではない。上人の「往生拾因私記」は飽くまでも善導主義、法然主義の上に立脚せる「往生拾因」の註釋である。粗放の言葉が許されるなら、上人の「私記」記述の動因は永觀律師を祖述し記念するといふよりは、善導宗の宣傳、法然主義の顯揚にあつたを考へられる。故にその「私記」には到る處に善導主義、法然イズムの熱情が充ちてゐる。この熱情こそわが「往生拾因私記」の存在理由ではあるまいか。即ち上人はその「私記」の劈頭に於てまづ永觀宗と善導宗との相違を甄別してその大見得を切つてゐる。上人の言葉をそのまゝ引用することは冗長に流れるから、かいつまんで云ふと、永觀の宗教は一心稱念阿彌陀佛の宗教である。たゞこの立札だけ見るに丸で善導宗をつくりであるが、少し奥へ這入つてみるに、丸でその風光が違ふ。其稱名は本願の行であるが、第十八の願文に於ける至心は今の一心であり、十念は今の稱念に相當する。この稱念を以て專念を發すのが至心であり一心なのである。従つてその一心は三昧であり、等持定である。この意味に於て永觀宗は專念を得ること、三昧に住することゝ要求する。これが永觀宗の生命である。けれども善導宗の所詮は飽くまでも口業の念佛、たゞ口業を以て生因の行とする。それで、等しく念佛宗と云つても、前者は意業中心主義、後者は口業中心主義で、その間非常な開きがある。善導宗徒としての見識を見せてゐる。更に「問、傳へ聞く、黒谷(法然上人)この書を用ひ給はず、何の不可あつて用ひ給はざる耶」といふ問題を掲げて、その下で善導の立場と永觀のそれとの相違點を四つまで擧げて、法然イズムの發揮を指摘してゐる點なきは、能く了惠上人の永觀宗に對する態度を語つてゐる。

たゞこれだけでもわが「往生拾因私記」の存在理由は澤山にある。私は茲に「批評は創作である」と云つたオスカーワイルドの句の中に、わが「往生拾因私記」の著作的價値が暗示されて居るやうに思はれるといふことを附加して先づこの小稿を閉ぢることとする。